

プラズマディスプレイ型電子情報ボードを活用した世界史の授業

三重県立四日市西高等学校
教諭
清水 豊

1. 実践授業の概要

- 1.1 学校名 三重県立四日市西高等学校
日付 平成16年11月26、29日
対象学年 3学年
教科 地歴科（世界史）
単元 自由主義と国民主義
時間数 2時間

1.2 実践授業の目的

①ともすれば無味乾燥になりがちな講義型の世界史の授業にデジタル教材の提示をとり入れることで、生徒の世界史に関するイメージを喚起し、興味・関心を持って取り組める授業を構築する。

②電子情報ボードのインタラクティブ性を生かしてクイズや設問に生徒自らが画面をタッチする場面を作ることで、一方的になりがちな講義型世界史の授業に生徒の主体的参加を取り入れた授業を構築する。

1.3 実践授業で活用したコンテンツ

- ①百科辞典ソフトの画像データ
- ②インターネット検索で入手した画像データ
- ③教科書、資料集からデジタル化した画像データ
- ④インターネット検索で入手した音楽データ
- ⑤パワーポイントで自作した図、表

2. 実践でわかったこと

2.1 IT活用の効果について

この授業を実践した世界史の講座は年間を通してすべての授業をプロジェクタとPCを使用して行っている。基本的に板書事項は黒板に、資料提示はプロジェクタでというスタイルで授業を行っている。

世界史の授業と言うのは、ともすれば一方的で無味乾燥な講義型の授業に陥りやすい。多くの場合、生徒には資料集を購入させ、授業の中で適宜参照させていると思うが、紙媒体の資料集はいつでも参照できるという利点はあるものの、授業に持ってこなかったり、持っても教師の指示通り参照しないなど、宝の持ち腐れの存在である。また、紙に印刷された静的な資料であるため、エンターテインメント性、インタラクティブ性に限界がある。刺激的、動的な媒体に日常生活を囲まれている現代の高校生にとって、静的な媒体というのは興味を引き出すには不十分である。その点、デジタル資料というのは、もちろん短所もあるが、紙媒体の資料を補う面を持ち合わせている。以下に列挙する。

①前面のスクリーンや電子情報ボードに大きく提示することにより、必要な資料を生徒全員に必ず見せることができる。

②動画やアニメーションを使用することで、資料に動きをもたせ、ダイナミックに提示することができる。

③画像だけでなく、音声も含めたマルチメディア教材としての活用ができる。

④地図などの提示した資料の画面上に直接書き込むことができる。

⑤教材の工夫によって、生徒が画面にタッチしたり記入したりするなど、参加型の授業が可能である。

⑥一度作成した資料は、何度でも使用できる。

つまり、今まで一方的な講義型が中心だった教科で、講義を補強したり、生徒参加を取り入れたりすることが、比較的簡単にできるというのがIT活用の利点ではないかと考える。

生徒側の効果としては、やはりイメージ化がしやすい、興味を持てる、動きのある図表を使用することで難しいこともわかりやすくなる、などの声はアンケートをとると必ず返ってくる答えである。

2.2 実践した授業における狙いと評価

(1) 実践前の狙い

①関心・意欲・態度 (◎) ②思考・判断 (○) ③技能・表現 () ④知識・理解 (○)

(2) 実践後の評価

①関心・意欲・態度 (◎) ②思考・判断 (○) ③技能・表現 () ④知識・理解 (◎)

2.3 課題について

①その単元の授業に適した資料を探したり、作成したりするのに労力と時間を要する。多くの教員はこの準備段階で挫折し、もしくははじめから I T 機器を授業で活用することをあきらめる。教材・資料を簡単に検索したり、利用したりすることのできる仕組みの構築とノウハウの提供が必要である。

②設備的な問題。授業で I T 機器を利用できる教室に限られている。電子情報ボードに限って言えば、設置・撤去に時間をとられ、短時間の休み時間では授業の準備が不可能、いう課題。現実問題として電子情報ボード、パソコン、プロジェクタを教室まで運搬し、各種ケーブルで接続し、キャリブレーションなどの位置あわせを休み時間で行うことは難しい。

3. その他

3.1 活用に際して留意した点・工夫した点

①準備作業軽減のために、今回はプロジェクタとスクリーンが不要な一体型電子情報ボード（プラズマディスプレイ型）を使用した。これだとノートパソコンを接続した電子情報ボードを移動・設置するだけなので、休み時間で十分可能。ただし、価格が非常に高いため、普通の学校で導入することはきわめて難しい。しかも重量が 100kg 近くあるので水平移動はよいが、階をまたぐ移動にはエレベーターが必要。

②電子情報ボードの利点を最大限に生かすため、動きのある資料（パワーポイントのアニメーション機能を活用）と生徒が実際に画面上で操作できるような資料（リンク機能を使ったクイズなど）を作成した。

3.2 授業時の様子

資料の提示だけでは、世界史に対する興味・関心の薄い生徒の集中力を持続させることは難しいが、今回授業の中で適宜クイズや画面の操作をさせることで、関心を持って授業に取り組むことができた。

また、年間の授業を通して資料にはできるだけ「生徒の身近なもの」「誰でも知っている有名なもの」「誰一人知らない妙なもの」を必ず取り入れるようにしている。授業がだれてきたあたりでそのような資料を効果的に用いることで、関心・集中力を回復し、その資料に関するやり取りから思わず双方向的な授業ができたりする。このような資料の選定と活用は何も I T 活用の授業に限ったことではないが、そういう資料を「活用しやすい」というのが I T 活用の強みではないか。

3.3 電子情報ボードを普及させるために必要であると思われること

①2.3①で記述したように資料検索・作成・活用の使いやすい仕組みの構築とノウハウの提供

②教室の整備。電子情報ボードの最大の難点は設置に時間がかかることである。電子情報ボードが黒板同様、普通の教室に常設してある必要がある。

③価格（一体型電子情報ボード）。画面の美しさ、操作のしやすさ、移動・設置の容易さでは、一体型のものがベストである。教室に常設していない現状で、できるだけ移動・設置に手間がかからないもの考えると、一体型になるが非常に高額である。価格面の問題がクリアされる必要がある。